

終戦 昭和二十年八月十五日 満州開原飛行場に

て終戦

入ソ日 昭和二十年十一月二十日

抑留地 クラスニヤード↓チタ

作業 伐採 その他

引揚 昭和二十三年十一月二十九日

引揚船 信洋丸

上陸地 舞鶴

現在 シード株式会社を設立して、代表取締役として元気に活動されている。また、老骨に

むち打って人生を生き抜き、シベリア抑留

死没者の慰霊碑建立運動を行い、遺族だけでなく、多くの府民、市民に協力を呼びかけている。

(京都市 北村 穂)

戦争と私

大阪府 中森 勇

一、家族的な教育隊

昭和十九年四月、旧満州国鉄嶺市の煉瓦建ての大きな兵舎・広い練兵場のある空き兵舎に、軍属として三重県から二十九人であったが、全国から集まっているので相当数いた。

入隊三日目に、私たち六人が吉林省九台县下九台街にある満州第二六四部隊教育隊勤務の辞令を受けた。首都新京から列車で一時間のところで、人口五万人ぐらいの静かな街で、部隊の近くに日本人夫婦の経営する漬物店があるところから、同胞が多数いるようだった。

ここも煉瓦建ての空き兵舎である。ほとんどの関東軍が南方戦線に転出したようであった。教育隊には先着の五人がおり、数日後に四人が到着し、教育隊が構

成された。

隊長 平野中佐 (東京都出身)

庶務主任 高橋少尉 (秋田県出身)

堀江曹長 (新京滿鉄宿舍に家族がおり、日曜日に遊びに行った)

筆生 伊藤軍属 (秋田県出身)

中森軍属

給仕 吉村軍属 (神戸市出身)

塩崎軍属 (愛媛県出身)

中川軍属 (大阪府出身・女性)

教務主任 後藤中尉 (広島県出身)

? 少尉

経理主任 ? 少尉

石垣軍属 (京都市出身)

炊事 稲川軍属 (関東出身)

大工 渡辺軍属 (?)

運転手 松平軍属 (?)

炊事・雑役に満州人を数人使用した。

私たち筆生は、教務主任・後藤中尉の立案により、

築城教育のプリントを作成した。ガリ切りをし、給仕たちが印刷を、またトレーシングペーパーに図面を複写し、焼き付け、逐次製本に仕上げた。五月に入ると在満各部隊の中・小隊長クラスの中尉・少尉が約三十人、学生として教育が始まった。

尉官であっても平日は丸腰の軍服姿であるが、始業・終了式は軍服に軍力をつけ、革長靴をはき、多数集まればそうそうたるものであった。教育期間は一カ月間で、隧道測量や炭鉱見学などもあり、私もよく同行した。六月には第二期生の教育が逐次行われた。

二、転出兵の心情

七月上旬、下九台に数人の留守番を残し、隊長以下我々は南満州の公主嶺市へ。ここも煉瓦建ての大きな空き兵舎。広い練兵場もあり、鉄道の引込線まである。

さてここで何をするのかと思っていると、新しい部隊の編成である。行き先は判明しないが、南方、沖繩、それとも内地か? 夜間、引込線から列車で出発した。数人の脱走兵があったことをあとで聞いた。平

和な満州から戦地行きは辛いことであつただらう。二回の編成をして下九台の教育隊に帰つた。

八月上旬、衛兵要員として小泉軍曹以下兵士八人が、また憲兵と満語の通訳が配属されて、教育隊も少し増員された。

三、住居と待遇

下士官と軍属の住居は、関東軍大演習当時建築された營外下士官用の木造宿舍で、六畳の和室であつた。冬は満州人がペーチカを焚いてくれ、部屋は暖かかつた。

月給百二十円・滞在手当百二十円、しめて二百四十円、国鉄当時の六倍であつた。食事は三食官給であり、日用品購入と日曜日に支那料理を食べに行くぐらいで、あまり金が必要ないので、百円を親に電報為替で送金し、残りは貯金した。当時としては高給であつた。昼休みは宮庭でテニスを楽しみ、夏は近くの畑で満州人から買った西瓜、まくわがおいしかった。

昭和二十年二月、一年繰り上げの徴兵検査があり、甲種合格となり、胸に桜をデザインしたバッジをつ

け、入隊の日を待った。四月末、春近い日曜日、友達と公園で遊んでいると、一人の娘が話しかけてくる。

日本人と思つていたら日本語を勉強した満州人であつた。日本人と話をしたかつたようだ。なかなか上手に話せる。日曜日ごとに教回逢つた。帰りはいつも彼女の家の前で別れたが、高い塀で囲まれた大きな家だつた。

四、入隊・即敗戦・抑留

六月中旬、東滿綏省東寧の第五七四部隊に現役入隊することになった。

軍隊から軍隊へ、軍属から軍人に、あまり変化がないが、教育隊の皆さんに見送られ、作成してくださつた寄せ書きの日の丸を持って入營した。

東寧は滿ソ国境に近いが、入隊した所は小さい学校のような所で、仮兵舎のようだ。新入隊者約二十人が初年兵教育を受けた。どうも我々だけでさみしいぐらいだ。七月中旬、国境近くの陣地の第三中隊に配属された。丸太づくりで屋根は草ぶきで、電気もなくお粗末さまだ。毎日陣地でタコ穴を掘るのが日課であつ

た。

八月九日、普段静かな陣地の近くの道路を、日本人婦女子を乗せたトラックが、また荷物を背負った満州人数人が後方に移動しているので何故かと思つて、夕方六時ごろ前方道路にソ連軍戦車が出現、まさかと思つて、我々陣地に戦車砲がさく烈、弾丸の風圧で樹の枝・葉が落下してくる。わが方は小銃のみでどうにもならない。ずいぶん長い間攻撃されたように思つたが、反撃がないので三十分ぐらいで終わった。翌日早朝から部隊本部と一中隊の陣地が攻撃されているのが一望できた。すべての陣地は撃破され、私たち七、八人は、ソ連軍に気付かれないよう夜間、後方に移動することにした。ここ二、三日乾パン食なので米飯が恋しい。畑にサトウキビがあつたので、失敬してしゃぶつた。

山の中で、一人の日本兵から敗戦と広島に原爆を投下されたことを聞いた。道路はソ連軍のトラックが何か荷物を満載して次から次へと絶え間なく走つていく。あとでわかつたが、広大な満州の総てが戦利品で

あつたらしく、列車とトラックで昼夜運び去つたらしい。

街に出ると多数の日本兵がソ連軍に武装解除を受けおおり、私たちもこれまでと覚悟し、列のあとに並んだ。銃と手榴弾一発を投げ出し服装検査を受け、収容所に入った。ここの兵舎は関東軍大演習時代のバラック建てで、食事は自前だから何か探すしか手段がないので、馬の飼料の固形豆粕や野草を食べた。

九月下旬移動が始まり、一〇〇〇人の作業大隊として行軍であつた。早朝から夕暮れ遅くまで、昼食時だけの休憩で六日間続いた。着いた所はどれもソ連領らしく、近くに駅舎がないが鉄道線路が見える。いろいろなデマが飛びかう中、荒野で三日間ほど野宿した。すると有蓋貨車を連結した列車が入り乗車することになった。もつぱら北朝鮮の羅新港から帰国と思つていたので、どうも方向が違うらしく、夜間星を見たところ北へ北へと走行しているとのこと、みんなは落胆し、車内は一時静かになった。長時間走行しているかと思えば、単線で行違いの関係か、臨時運転のこの列

車は三、四時間の停車もあり、五日間の列車輸送からトラック輸送でさらに北へ北へと運ばれ、しんしんと降る雪の十一月三日（旧明治節）に收容所に入った。

丸太を横に積み上げて造った、以前はロシア人囚人收容所であったであろう。電気もなく、この山の中で伐採作業かと思うと失望した。入所二、三日目に工場技術経験者は集まるようにと通告があったので、経験はないがこの山奥ではとてもじゃないと思ひ、なんとかなるだろうと経験者になりすまし、職種は仕上工とした。工場のある所はたぶん街で、ここよりは条件が良く考えたからだ。

新收容所は各作業大隊より集められた工場技術経験者五〇〇人で構成され、白のモルタル造りで、電気もあり、寝台もまあまあである。ついでにぞ！と思つた。旋盤工・鋳物工・製缶工・仕上工などで、工場で働くことになった。日本人收容所の隣はロシア人囚人收容所で、共に工場業者である。工場の主な要職は民間人で、ロシア人囚人と日本人戦争俘虜が肉体労働者であつた。

收容所・工場とも三重の有刺鉄線で囲まれ、四方の望楼から二十四時間監視している、檻の中の生活がいつまで続くのか、先のことなど判らない。

一週間ほどすると、技術のよくない者約五十人は屋外作業に配置換えされ、未経験者の私は当然その仲間入りした。貨車から冷凍肉・冷凍魚や石炭の下ろし、また道路の補修作業などであつた。

入所以来見覚えのロシア語がいくらか判るようになったとき、事務をする者が必要になり、幸い事務所で働くことになった。事務所は工場の二階にあり、日本人の屋外作業者の労務関係の仕事であつた。

事務所の構成

ナチャニク (所長) 中尉の軍人

エコノミスト (作業ノルマ計算) 囚人

ボウハクテル (作業の金額を計算) 囚人

カマンジル (現場監督) 囚人クリコフ

(日本人現場監督) 海原

(事務) 中森

所長以外は囚人・戦争俘虜であつた

た。

屋外作業をした証明書の作業量をエコノミスト、ボウハクテルに各々計算してもらい、更紙に線をひき様式をつくり、ロシア文字で各人の名前を書き、毎日の作業パーセントと金額を記入することが主な仕事であった。

工場には旧満州から運びこまれた旋盤機械が据え付けられ、日本人が使うほうが能率が上がるという計算らしい。また工場広場には、戦利品の日本軍の戦車や機械類などがスクラップとして野積みされていた。

昭和二十二年四月頃、屋外作業者が一二〇人ほどになり、事務所が收容所の近くに、收容所の要員もかわった。

收容所の構成

所長 中佐 (大柄で温厚なおじいさん)

警備 中尉 (努力して昇進したような中年将校)

下士官・兵士・約十人

労務 上級中尉

(スポーツマンタイプの青年将校)

事務 中森

経理 少尉

(やさしそうな青年将校)

事務 リラー嬢

(目がパチリとかわいいが足が少し不自由)

ドクトル 女性中尉

(口紅・マニキュアをつけ革長靴をはき美人)

收容所の日本人概略

責任者 滝沢 (東北出身・旧大尉)

工場作業者 約三七〇人

屋外作業者 約一二〇人

医師 一人 (薬がないので困っていた。旧中尉)

炊事 三人 (仕事柄太って血色良好)

散髪 一人

所長はじめ当局関係者は近くに宿舎があり、妻子同

伴であった。

上司の上級中尉や經理少尉は朝十分ぐらいの在室で留守のほうが多いので、気楽な毎日であった。たまに電話で仕事の指示があった。

日本人が収容所から出入りする時は衛兵と警備兵が人員を引き継ぐのが平常で、作業現場は警備兵の監視つきであるが、最近は互いに信頼し、一緒に来ているという感じだ。

またソ連人と呼ぶ場合、頭に「同志」をつけることでさらに親愛を増していく。例えば「兵隊さん」とか「少尉殿」と言うよりも、「同志・兵士」「同志・少尉」と言うほうが「志を同じくすること、または、する人」で、親密な友に使用した。

私は仕事の都合上ときどき一人で他の工場へ作業証明書をもらいに行ったが、上級中尉から通知済みであったのか、衛兵に行先を告げるだけですんだ。

交通手段は、道路を走行しているトラックに手を上げて止め、降りる時は運転台の屋根を叩いて止めてもらった。民間人はだれでもこの手を使っていた。

昭和二十二年十月頃から作業の往復には労働歌を合唱するようになり、デモクラシー色が入ってきて、夕食後は勉強会があり、青年部の実行委員もやった。

ロシア人囚人と話をしたが、彼らの刑期が十―十五年と長いことで、罪名はいろいろだが窃盗犯が多いように思えた。

毎年十一月がくると、冬季の帰国がないので、翌春の帰国を心待ちに、話は食べ物のことばかりであった。

昭和二十四年六月、突然全員帰国の知らせがあり、すぐに出発準備するようにとのこと。入ソ以来のたび重なる所持品検査で最低生活用品のみで、荷物は少ないのでなんのことはない。ロシアの皆さんに挨拶もそこそこに、隊列をつくり出発した。

終戦四年後の日本の状況がはつきりわからないので不安もあるが、ダモイ（帰国）は最高の喜びである。ナホトカまでの列車輸送は、往路と違ってなんとなく速い。港近くで二、三日の待機で遠州丸に乗船、七月十九日、待ちに待った祖国舞鶴港に上陸した。